

試される私の「国際交流」

開学2年目をむかえ、国際文化交流学部を中心として、海外の大学とのMOUの締結が一気に加速した感じがする。あとは、大学が目標としてかかげる「小松から、未来へ」、そして世界で活躍する人材を育てることにつながればよい。学生、教員、学術に関する充実した交流プログラムが生まれ、いよいよ期待が高まる一方で、留学中に必ず遭遇するであろう「アクシデント」が致命的なものにならないことを祈るばかりである。

交流窓口を率先して引き受けるスタッフを見るにつけ、いつも思うことがある。かつて自分が海外での留学や研修で受けた「プレゼント」のほうが、体験した「クライシス」をはるかに上回る、幸運な生還者であるとすれば、その感謝の気持ちを何らかのかたちで恩返ししたい、おそらくそうした熱い思いを胸に宿しているのではなかろうか。すでに台湾や中国に送り出した留学生からの便りが全くないのはどうしたことかと、提携の労をとってきた岩田学部長はいささか不満げであるが、「便りのないのは良い便り」ということで、余計な心配を打ち消しておられるのだろう。

今秋、北米のテネシー州にあるオースティン・ピー州立大学（APSU）との交流署名式に臨む機会があった。1927年創立の学生数1万人の総合大学であり、州の発展に貢献する人材を育てることを目的とし、農業、経済、工学、医療、芸術、社会教育などの分野において着実な教育実績を残している。APSUはナッシュビルから車で一時間足らずのクラークスビル（人口は15万人）にあり、提携の窓口となった本学の木場先生によれば、この地域を拠点とする日本の企業や製造業が集積しており、日本領事館が置かれるなど、留学生にとっては治安もよく、自然環境に恵まれたところであるようだ。

初めて訪れる場所、とくに海外の場合は、それまで眠っていた感官が目を覚ます。私の場合は嗅覚であるが、今回は聴覚までも蘇った次第だ。アメリカ南東部のこの一帯は保守的政治風土と肥沃な農業地帯にあたり、ロサンゼルスからの渇きやニューヨークの匿名市といった雑味がなく、キャンパス全体を落ち着いたいい匂いが包み込んでいる。一方、気晴らしに覗いたナッシュビルの街では、カントリーミュージックとプレスリーゆかりのロックのライブが鳴り響き、気の遠くなるまで、度数の高い地ビールで乾杯のリフレイン。留学生活には、こうした快樂に無防備のまま開かれる自分が、どこまで生きのびるものか、どこかで賭けているような危うさが伴う。だがたとえ失敗があっても、海外に飛び出す若者にはそれを宝物に変えるだけのレジリエンス（復元力）が備わっているのだ。送り出す側の度量もまた試されるのが国際交流である。

2019年11月22日

公立小松大学
副学長 横川善正